

福井市立郷土歴史博物館『研究紀要』第十六号（平成二十一年三月）抜刷

和田八幡宮と『和田八幡宮縁起書』（『社記』）について

―附翻刻『和田八幡宮縁起書』―

角 鹿 尚 計

史料紹介

和田八幡宮と『和田八幡宮縁起書』について

―附翻刻『和田八幡宮縁起書』―

角 鹿 尚 計

一、和田八幡宮の創祀と変遷

和田八幡宮（福井市和田三丁目一一一三番地鎮座・宗教法人・神社本庁包括・旧郷社・旧足羽郡・平成二年社号を「八幡神社」より改称した。）は、現祭神として応神天皇・仲哀天皇・神功皇后を奉祀した八幡社で、社伝によると、天徳三年（九五九）源満仲が、石清水八幡宮の祭神を勧請して創祀したものという。

当社は、「越前国絵図」にみる西方・和田出作分・測上・中（和田中町）・和田東の諸村に比定される和田荘の産土神で、和田荘とは、『越前国古今名蹟考』には、右の和田郷五ヶ村に、吉田郡和田郷二村である上北野・下北野を加えており、また同社の縁起書『和田八幡宮縁起書』（以下『社記』）でも、「北陸道越前国足羽南ノ郡・和田ノ庄七郷^{カウ}ノ總社」とみえることから足羽郡七ヶ村にわたる和田荘の総社として繁栄したものとみられる。旧足羽郡最大の莊園であったとみられる和田荘総社和田八幡宮は、和田荘が中世期最も開発が進展した頃同時に社頭も全盛期となり、『社記』に記されるような壮大な境内と多くの院坊・社領を保有し

たようであるが、天正年間（一五七三～一五九二）の兵火に罹って焼失し、慶長年間（一五九六～一六一五）の結城秀康による再建を待つこととなったのである。

ところで、和田荘の成立は、平安末期とみられている。建久二年（一一九二）十月日付「長講堂所領注文」（『島田文書』『鎌倉遺文』巻一・四二六頁）に、後白河法皇の長講堂領に編成されたことがみえ、ついで、正和元年（一一三二）十二月日付「伏見上皇宸筆処分状案」（『伏見宮家御蔵』『鎌倉遺文』巻三十二・二二七頁）には、伏見上皇の追善供養のために、長講堂領から京極為兼に分与されたことがみえる。

この京極家は断絶し、南北朝時代には葉室宗顕が知行していた（『京都御所東山御文庫記録』康応二年（一一三九〇）二月十三日付「後円融上皇院宣案」）。宗顕は応永十六年（一四〇九）十一月三日に薨去し、その後朝倉氏台頭と共に和田荘の領有が変遷したとみられ、『朝倉家伝記』では、嘉吉元年（一四四二）終結の結城合戦の恩賞として朝倉頼景に和田荘が与えられている。この朝倉氏の重臣として和田荘の領有に係りたとみられる和田氏の存在が、『朝倉始末記』等にもみえる（『福井市史』

通史編古代・中世 四七二～四七三頁参照）。

江戸時代は、和田中村・和田東村とも福井藩領で、『越前国古今名蹟考』（杉原丈夫編『新訂越前国名蹟考』三六〇～三六一頁。）には、

◎八幡社 勝見橋より東十五丁にあり。

本地 阿弥陀

○縁起云。村上天皇御宇天徳三年左馬頭源満仲造営。

二月十五日神輿下着に付例祭とす。坊舎十六坊、社領数十町。後朝倉家より二百町寄附。天正兵火の節三明坊本尊靈宝を抱き立忍び、再小菴を結ひし処、秀康公御再興。忠昌公拝殿廊下瑞籬御造営。慶長十九年八月十五日、長勝院様より絵馬二枚御奉納。光通公弓矢金灯籠御寄進。往昔靈夢にて竹十本生、泉涌出に付院号山号とす。

宝物 武田信玄所持の鈴 弘法大師筆不動尊一軸

鎮守 山王石祠 鳥居外 本尊 閻浮檀金千手観音

○反橋より三十間許南、鳥居より十間許西、井筒有。今昔御供水の旧跡なり。寺社縁起

・祭礼 二月十五日 八月十五日

・社領 百石 和田東村の内除地

宰相忠直公御寄附。絵図記 ○元和九年正月十五日御寄附 大坂御出陣の節御立願有之故也

天台宗 別当 竹林山養泉寺 三明院

とみえるが、ここに引く「縁起」とは、本書『社記』を指すものとみられる。

また、松平春嶽の『真雪草紙』（福井市立郷土歴史博物館蔵）には、和田八幡社ハ、於福井ハ随分名高き所也。此別當を三明院といふ。天台宗也。神體ハ住職一代二一邊ツ、拝む。其餘ハ閉帳な

り。天保十四年癸卯我初入の時参詣す。住職拝禮の義を伺ひけるゆへ拝禮せり。三尺斗りの阿彌陀の木佛也。いかにも古代のものにて敬みて拝す。多田満仲の守り本尊にて、軍陣にも携帯されたりと、住職のはなしなり。

とみえる。

なお、明治の神仏分離令によって別当寺であった天台宗竹林山養泉寺三明院は、遷俗して社家宮城家となり現在に至っている。

二、『社記』について

和田八幡宮の『社記』は、現在同社宮司宮城始（壹）氏の所蔵である。表紙は、直題で「八幡宮縁起」、内題は、「南閻浮提・磯城島ノ國北陸道越前ノ國足羽ノ南ノ郡 和田ノ庄七郷ノ總社 源家擁護ノ神正八幡（宮） 大自在王菩薩 本地阿彌陀如来ノ縁起」とある。しかし、『社記』本文中に「和田八幡宮」の社号がみえ、現在もその社号であって一口に膾炙しているからこの『社記』の書名を『和田八幡宮縁起書』として紹介することにした。墨付十三枚、法量は縦二・三糎、横二七・五糎。本文には朱筆・加筆が見られる。何れも文字の修正程度で成立後のものと見られるが、本文の内容には影響がない。成立は奥書により享保十五年（一七三〇）三月下旬とみられる。著者は、奥書に龍阜沙門傳東漸が「古記」を「筆削」して謹書した由が記されている。

そうとすれば、もともと存在した「古記」の要約本が『社記』ということになるが「古記」と『社記』の関係は判然とはしない。また著者の伝記も現在のところ不詳である。

さて、『社記』の内容は社寺縁起らしく祭神の神徳、本地垂迹説に基づく神仏融合譚、神慮による奇蹟譚、社頭の盛衰、武家の崇敬等をとう

とうと記載し、信仰的内容に満ちている。おそらく祭礼のおりなどに社僧が神前・仏前において読み上げたのであろう（縁起は、高野山真言宗応頂山勝尾寺などで奉読されている例がある）。本書が縁起書であるという性格上その記述内容は当然信仰の所産であり史書・史料として扱うことは注意を要するが、その背景にあるのは非常な神仏への崇敬であり、戦乱の世が落ち着き、社寺の復興が盛んになされた江戸時代初期の清新の気に満ちた一書として思想上稀有なものといえよう。

そこで以下にはこの『社記』を翻刻するが、その前に一般の利用に要するために本書の大意を口語訳により紹介しておく。

三、『和田八幡宮縁起書』大意・口語訳

越前国足羽南郡和田庄七郷総社・源氏擁護の神・正八幡宮大自在王菩薩・本地阿弥陀如来の縁起（和田八幡宮縁起）

村上天皇の御世、すなわち平安時代中期の武将であり、清和天皇の第六皇子貞純親王を父君とされたので六孫王と号された源経基卿が鎮守府將軍に任ぜられ、鎌倉を守護した。卿の長男源満仲（九二二―九九七）も父について鎮守府將軍に任じられ、特に武功を以って正四位下に叙せられ信濃国一國を賜る。天徳二年（九五八）村上天皇は、満仲を召されてその忠勤を喜ばれ、帝都に近侍することを命じられた。そこで、満仲は、摂津の多田の地を賜った。満仲は、摂津多田庄新田に居て更に陸奥・摂津・美濃・越前など諸国の権守（ごんのかみ）に任じられたので、源氏の威厳日に増していった。さて、この時越前国足羽南郡に洪水がおり、水は山を崩し丘まで至った。また、建築良材が百本流れに流れて和田の沼口に流れ着いた。水が引いたものの、良材はなお積まれてそのま

まになっていた。郷民は、その良材を争って自分のものにしようとした。しかし、良材には「八幡宮」の三文字が木彫されていて人々を驚かせた。このことを（越前の）政所の司に報告し、政所は多田の政所に告げた。この時、満仲卿は霊夢を見る。常に信じる阿弥陀如来（行基菩薩作という）のお告げであった。「われは、汝の甲冑の間に在って弓矢の神となり、汝を守護せん」。満仲は感涙して阿弥陀仏に深く帰依し、阿弥陀仏のお告げにしたがって石清水八幡宮に倣い宮祠一字を建てることになった。満仲は、如来の左手に懸っていた短冊の神の歌に、「いわしむづこしのながれにあとたれてみなもとなぐてらすよのつき」とあったのを見て喜び、いまだ北陸に神の垂迹の縁あることを知らず、どこの地を望まれているのかと、試みに矢を放って矢の止まったところをその地と定めることにした。そこで満仲は、傍らにあった弓と白羽の矢をとって、祈念して矢を放った。東北の方角に飛んだ。海遠く山つらなり水清みて月澄む処であるが何処とはわからなかった。夢覚めて尊像を拝し夢の中の事をよくよく考えると、越前の方から報告があった和田郷の神木の事とお告げが符合した。このことを都から来た源信僧都に満仲が語ったところこれは霊夢であり正夢であることを告げた。昔、石清水八幡宮を創立した行教は、武内宿禰の子孫で大和の大安寺にいた。貞観元年に宇佐八幡宮に詣でて昼は般若経を読み、夜は密教の勉強をした。時満ちて夢に大神が告げるに、師が王城に近侍するなら私も天皇を守護しよう。そこで山崎の地に着いた。その夜、夢に大神が我が居るところをみよという。東南を見ると、男山に大光が輝いていた。そのことを天皇に申し上げた。天皇は詔を發せられて、橘工部に宇佐のような宮を建てさせられた。三像の大神のお姿は師の袈裟の上に現れたので、三像を安置した。宇佐の神が石清水に移られたのである。石清水の神は専らに帝都を守護された。今神は北陸にご縁があった。北陸に鎮座されるのも皇城

の守護である。縁とは、かの越前和田郷の神材のことであろう。この神を祀ることによって国家は隆盛し、源氏も栄えるであろう。満仲これを聴いて喜び渡部綱という家臣を越前の国に下向させて和田の郷の宮地を御祓いた。そして宮祠を建て、お宮のありようも石清水ようになさろうとした。時に、天徳三年（九五九）四月十五日のことであった。この年の五月十三日、土木工事を起工、たくさんの工たちを動員して建築を怠らず、夜昼ついで明年八月十三日日本社・拝殿・楼門・回廊・楽堂・護摩堂・齋堂・鐘楼その他の房舎や諸物も悉く整備された。二月には慧心（恵心力）僧都の弟子である順晶坊が本尊を持参し仮宮に安座させ日を撰んで同八月十五日に新宮に遷座した。満仲は、藤原仲光を以って奉幣使と為し、新社に詣でて神馬一匹及び金装横刀一鞘、自筆の法華經一部を郷民に賜った。この日清水が社前に湧き出でた。今社殿の前にある反橋の下に清水がこれである。白羽の鎗矢は、殿上の鰹木の上に立てたので観る者を驚かせた。また、託宣があつて、宮地に竹が生い茂れば源氏が繁盛するという。しかし生えては枯れ、枯れては生えるのは物の常である。数百年の後、竹が枯れて恐れ畏まる。今日宮の竹が大いに枯れても神威に違ふものではない。その夜翼の方角に竹数千竿叢となる。神託のように清水が涌いた。だから本坊を養泉寺と名づけた。神竹の生えたところを竹林山と号した。この時に社地を計ると東西五・六町、南北十三町であった。その中を区画して院坊を置いた。それは、十六箇所あつた。その十六の院坊とは、円持院（本坊養泉院の院号）・松林院・杉本坊・多門坊・三明坊・嘉例寺（今は田の名に残る）・東雲寺（今は畑の名）・安住院・光明院・円融院・本光院・長久院・己心院・来迎院・慧照院と別に浄徳寺を置いた無常院である。また、円持院には当社の別当職を当てた。その他、宮司・欄宜・巫覡戸・祝局を分けて給地を賜った。ゆえに宮司町・祝町があつて今は畑の名になっている。年中諸坊の油盞は一箇

所に集めると山のようになった。だから土器山があつた。そのところは今字名で田の名になっており、土器田という。また執事・行事相集つて歳の分を等しく計算した。だから等殿があつた。今このところは田の名になっていて等用仕田と云う。このころこれだけ栄えたことをよく記憶してほしいものだ。社内を除いて社家十六坊地に及び、和田庄二百余町を分けて御供料とした。且つ本坊の華香料を設けた。官命あつて、領内の村に松・杉・檜・楸などの佳木を運んで境内に植え見事な景観となつた。毎年正月七日より十一日まで護摩供を修め、専ら宝祚長久・武運亨通を祈つた。十二日には大般若經六百軸・孔雀明王經・最勝王經等の諸大乘經を転読して、更に天下泰平・国家安全を祈つた。二月十一日に神輿が御旅所に御幸した。宮地より十町ばかり河瀬に御旅所の旧址あり。放生会を行い競馬・流鏑馬を行う。同十三日、神輿が本社に還御される。拜殿において法華八講会を設ける。同十四日再び護摩供を修め、十五日から十六日まで諸伶人に代わる代わる法楽を奏した。世に云う能である。万歳を唱えた。雨天は延期し晴れに行つた。八月の祭礼も同様、相撲を納め童が歌い踊つた。世に和田の大寄といった。それから四百九十余年の後、花園上皇の御世、即ち享徳年中（一四五二―一四五四）に越前国主斯波武衛・義健ら武衛家に太野持種の次男義敏を養子とする。家臣織田興信・千福久国・増沢祐徳・二宮冬澄、その弟重衡等義敏と合わず相謀つて足利將軍義政に譖（そし）り、義敏を追つた。義健が亡くなり織田千福等、渋川義紀の子義廉を斯波家の後継ぎとして斯波治部大輔という。義敏は隠れて伊勢貞親を頼り、將軍義政へ訴え、赦しを請うた。義政赦し、義敏は長祿元年四月に入洛した。義政に会つて感謝した。一方織田・千福・増沢等これを悦ばず兵を興して道を遮り義敏を殺した。義政大いに怒つて追討の書翰を黒丸城主に送り、朝倉敏景に織田・千福・増沢・二宮らの逆賊を討伐した。敏景は国士であつた。和田の御神前深

く勝策を祈願した。敏景は九千余の兵を率いて敦賀郡に向かい敵と対峙し戦に及んだ。長祿二年春より翌年五月十三日に至って二十一戦、寛正元年二月二十一日に、兵八千五百を率いて阿波賀城戸口において力戦して大いに破れたり。同三年八月二十四日鯖江新庄に戦い、同五年八月八日また兵七千五百を率いて千檜山・蓮浦に戦った。同六年七月十七日兵六千を率いて清水山に戦い、同八月二十八日、兵二千七百を率いて芝原に戦う。七年間の戦功はおよそ二十六度首をとること三千余級、柵を抜き城を陥落することは数えられないほどである。逃げるものを追ひ、逃げることを遂げ、しばしば戦ってはしばしば勝った。和田八幡神敏景の軍中に現れて神の御加護を受けること数度に及んだ。敏景は早い書面を義政に送った。義政大いに悦んで感状を賜った。この時織田一族はやや滅したが千福・増沢らは敗れ逃げて尚杣山城に籠もった。杣山の城は百二の関を固め攻められなかった。敏景は堀江景用を遣わして和田八幡宮に参籠した。兵あつめて一万五千五百人、寛正六年正月月中旬黒丸城を発して杣山城に向かう。敏景は書状を以ってまず敵の内心を図り、堀江孝晴を大手の大将とした。蜂須賀氏貞を搦め手大将とした。敏景は、和田八幡に祈念し、乗る馬の名は雲龍足と名づけた。神の守護により凱旋した敏景は齋戒して和田八幡に参拝し、奉幣の礼を修め、神馬・太刀・鎧・弓矢を献納した。文明三年五月二十一日、義政は敏景に越前国を賜った。和田の神祠を復興し華麗さを増し、放生・八講や絶えていた祭礼を継いだ。また和田村に一千貫文の地を加えた。朝倉義景が織田信長と戦を交えて利あらず、大野に敗北し景鏡の欺きによりて囲まれ曹源寺に殺された。この頃に本願寺衆徒が越前・加賀・能登三州一宗衆徒と唱えて高田派衆徒が争い、加賀では富樫氏を殺す。信長によって神社仏閣が兵火に罹って焼かれた。東郷村西山の天台律宗興祥寺住職の夢に異人が現れて言うには、「私は和田の神である。暫く汝が房をかりて、兵火を

避けよう。汝わが立つところをみよ。」という。夢覚めて戸を開けてみると、石の上に光り輝く仏像があった。住職感涙して喜び袈裟に包んで持ち帰りこれを敬した。一揆の者ども火を放って和田神宮の房舎林を焼いた。壮観な姿も一朝のうちに烏有となる。沢山の社僧や社人も焼かれ殺された。ただ三明坊は免れて藏経を二十年持ち続けた。乱世が終わり旧所に帰ってきて祠を建てた。慶長六年徳川家康公越前国を結城秀康公に賜った。入国にあたって本多富正を先に派遣する。和田の祠の前に来たつてその由緒を従者に問うたところ「この昔多田満仲の草創の八幡大社であります。近頃天正の兵火に焼かれました。」という。富正記録して、結城秀康に報告した。秀康は社を興しその子忠直も和田八幡宮の門楼・拝殿以下を完備し、天正の旧観に復興した。三明坊に当社の別当職を預からせ、武田信玄の寄進した大聖靈験不動明王像を掛けた。信玄ゆかりの瀬躰（せのぼり）の金鈴（信玄が甲州で二十一日間護摩を修し、期満ちて川中に鈴を投じ、修力を試したところ鈴が鳴った。瀬を上つてまた鈴をひらつて所持したので、せのぼりの鈴という。信玄の願いによつて当社にあるのだという。）を振り、護摩供を修めて大般若経を転読し国運長久を加持した。元和九年正月十五日、社領百石を賜る。東村を采地とした。松平忠昌公に越前五万石を松平直政公に大野三万石を勝山二万石を松平直晴公に与えられたが当社の社領は削られることがなかった。その後歴代の藩主の時代も社領は変わらなかった。当院の三明坊尊久を以って中興開基第一世とし、三部法大阿闍梨法印大僧都尊久大和尚位と称す。第二世大阿闍梨法印大僧都尊英大和尚位という。このときに三明坊を改めて三明院となす。第三世伝燈大阿闍梨法印権大僧都實純大和尚位、第四世大阿闍梨法印権大僧都賢純大和尚位が法統を継いで連綿と至っている。

和田八幡宮と『和田八幡宮縁起書』について（角鹿）

時に享保十五年季春（三月）下浣（二十日から月末までの頃）の日

龍阜沙門傳東漸謹て古記によって略述する。

四、翻刻『和田八幡宮縁起書』

凡 例

一、『和田八幡宮縁起書』の全文翻刻である。底本は、和田八幡宮社家宮城始氏所蔵本である。

二、翻刻にあたり、文字等の不審箇所は、文字の右側に（マ、）と記した。また、本文の加筆部分は、挿入箇所の下に（ ）で記し本文に入れた。その他異体字・句読点等はできる限り底本の記載を尊重したが作字不能の文字については現行のものに改めた。ミセケチは、訂正文字の左側に示し、修正文字のあるものについてはその右側に示した。一文の続く箇所における改行は印刷の都合上底本の改行のままにしている。三、翻刻にあたり所蔵者の和田八幡宮宮司 宮城始氏に感謝いたします。

南間浮提・磯城島ノ國北陸道越前ノ國足羽南ノ郡。和田ノ庄七郷ノ總社。源家擁護ノ神正八幡(宮)大自在王菩薩。本地阿彌陀如來ノ緣起

原^{もと}夫^そ人^{ひと}王^{わう}第六十二代村上帝ノ御宇。六孫王源經基郷。任^{まか}鎮守府ノ將軍。在^に鎌倉ノ守護。太内一長男ノ左馬助滿仲朝臣。相繼任^{ついでに}鎮守府ノ將軍。特^{とく}以^{もつ}武功^{ぶくう}一藏^{いざう}山^{さん}黑鬼^{くろおに}累叙^{かさねに}正四位下ノ勅^{しやく}賜^{たまは}信濃一國ノ天德二年。帝御^{みかど}南殿^{なんてん}詔^{みこと}滿仲^{まんちゆう}汝股肱。忠勤之情。大愜^{たいしん}朕意^{てんい}宜^な居^ゐ近^き於^お帝都^{てい都}益^{えき}加^か衛護^{ゑいご}上。遂^{すなは}賜^{たまは}攝^{しやく}之多田ノ地。滿仲徒居^{ただ}攝州多田ノ庄新田。更^{さら}補^{おぎな}奧攝濃越諸ノ州權守^{くわんしゆう}源家威權曰^い増盛大ナリ矣。當此時也。越前國足羽南ノ郡。有^あ洪水^{かうすい}薦^{すす}臻^{しん}。湯湯^{とうとう}山^{さん}襄^{さか}陵^{りやう}。或^{ある}良材數百本。泛^は流^{りゅう}落^{らく}千和田沼口^{せんわでんしやくぐち}水退^{みづひき}而材猶積如^な故。郷民爭聚欲收取^{しゆしゆ}之。然^{しか}而觀^み有^あ木彫^{もくでう}八幡宮三字。咸^{みな}驚異^{きやうい}以為^{おも}。上游必有^あ宮之地。竟^{つひ}遡^{さく}流^{りゅう}討^{たつ}之。相詢^{さうしゆん}千里^{せんり}而不得^え有^あ戴^{たい}於^お神祠^{しんし}者^{もの}。歸^{かへ}以^{もつ}事^{こと}告^つ布政司^{ふせいし}布政司不敢^{おそ}自裁^{しさい}亦以^{もつ}訟^{そう}諸多田^{しよた}政所^{せいしよ}先是^{さき}滿仲郷一夕夢^{いちむ}。常^{とこ}所^{ところ}信念^{しんねん}阿彌陀如來。行^{ぎやう}基^き作^{さく}像^{ざう}至^{いた}白^{はく}迦^か陵^{りやう}仙音從容^{せんいじゆう}誥^ご曰^い。我^{われ}在^に郷甲冑^{きやうきゆう}間^ま為^な弓矢^{きうし}之神^{しん}擁護^{ようご}スル。於^お郷^{きやう}一^{いつ}年^{ねん}尚^{なほ}矣^{なり}自^{より}今^{いま}已^や後^ご。可^べ三^{さん}緑^{りく}在^に北地^{きたち}。宮祠^{きうし}一^{いつ}準^{じゆん}石清水宮^{いししみづきやう}。郷其思^き施^し。滿仲揮^ひ淚^{なみだ}更^{また}對^{たい}言^{げん}吾^{われ}儕^し多年^{としな}之信根猶未^{なほ}カレ^な固^{かた}耶^や佛陀捨^{ぶつた}我^{われ}矧^{しん}權迹^{けんせき}源氏^{げんし}所^{ところ}由^{よし}特^{とく}釋^{しやく}我^{われ}欲^{ほつ}復^ふ何^{なに}適^{たつ}。如是^{かく}三^{さん}陳^{ちん}如來廣大^{くわんだい}慈悲^{じひ}。更^{また}殷勤^{いんきん}慰諭^{ゐんいん}スラ。郷莫^な作^{さく}是^{これ}念^{ねん}。不^な見^み經^{きやう}來^{きた}現^{げん}相^{さう}品^{ひん}如^{かく}云^{いふ}。佛身充^み滿^{まん}於^お法界^{ほふがい}。普^ふ現^{げん}一^{いつ}切^{しやく}群生^{ぐんせい}前^{まへ}。隨^{したが}縁^{えん}赴^{しゆ}感^{かん}摩^ま不^なレ^な周^{しう}カフ。而^{しか}常^{とこ}處^{ところ}此^こ菩提座^{ぼだいざ}(宣^{せん}玉^{ぎよく})(へ^へ)(り^り)。隨^{したが}縁^{えん}赴^{しゆ}感^{かん}者^{もの}。是^{これ}機感相^{きかんさう}應^{おう}也^{なり}。而^{しか}常^{とこ}處^{ところ}此^こ菩提座^{ぼだいざ}者^{もの}。菩提座^{ぼだいざ}者^{もの}。一切衆生^{いしやくしゆうせい}心^{しん}是^{これ}。如來恒^{こゝろ}不^な離^{はな}一^{いつ}切^{しやく}衆生^{しゆうせい}心^{しん}無^な量^{りやう}劫^{けつ}來^{きた}為^な衆生^{しゆうせい}施^し無^な畏^{おそ}是^{これ}故^{ゆゑ}我^{われ}雖^な遠^{とほ}去^きレ^な此^こ而^{しか}常^{とこ}在^に郷^{きやう}一^{いつ}心^{しん}菩提座^{ぼだいざ}滿仲^{まんちゆう}為^な奇^き異^い之想^{しやう}悲喜交^{ひき}發^{はつ}。瞻^{せん}仰^{やう}尊顏^{そんげん}目^め不^な暫^{しば}捨^{はな}。既^{すで}而^{しか}觀^み下^{くだ}如來^に左手懸^{しやうしゆけん}クルヲ若^{かく}短冊^{たんさく}者^{もの}乃^{すなは}取^と而^{しか}視^み之^を有^あ一^{いつ}首^{しゆ}詠歌^{えいか}曰^い。伊和

資彌抽孤資拏那伽力尼吧都陀力德彌那默都那伽休德囉修余拏抽龜。滿仲深^{しん}頂^{てう}戴^{たい}神歌^{しんか}而^{しか}喜感^{きかん}之心^{しんしん}。眸然^{しゆうぜん}見^み於^お面^{めん}盜^{たう}於^お背^{はい}尋^{じん}言^{げん}。神^{しん}之^の濟生垂迹^{しせいしゆせき}縁^{えん}。未知^{しらず}其^を在^に北陸^{ほくりく}果^は何^{なん}土^ど何^{なん}許^{きょ}也^{なり}願^{ねん}クハ^ハ為^な見^み示^し焉^{なり}。神^{しん}曰^い。郷嘗^{かつ}試^し自^{より}射^{しや}以^{もつ}看^{かん}矢^や所^{ところ}止^{とど}處^{ところ}此^こ正^{ただ}是^{これ}我^{われ}所^{ところ}住^す處^{ところ}。滿仲顧^こ側^{わき}有^あ素弓^{すきう}並^{なら}自^{より}羽^う矢^や一^{いつ}枝^{えだ}。廼^{しか}執^{しやく}之^を祈^{いの}誓^{ちか}向^{むか}天^{てん}彎^{わん}而^{しか}發^{はつ}之^を鳴^{なり}鐃^{じやく}遼^{りやう}室^{しつ}。良久^{ちやうきう}而^{しか}遙^{とほ}隨^{したが}於^お東北^{とうほく}方^{はう}趨^き進^{しん}看^{かん}之^を。箭^{せん}樹^{じゆ}於^お渺^{みやう}邈^{みやく}焉^{なり}數^{すう}澤^{さく}中^{ちゆう}其^を地^ち平^{へい}衍^{えん}而^{しか}海^{かい}遠^{とほ}山^{さん}錦^{きん}水^{すい}清^{せい}月^{げつ}澄^{てい}四^し達^{たつ}豁^{かく}如^{かく}也^{なり}。然^{しか}猶^{なほ}恍^{はう}恍^{はう}惚^ぼ惚^ぼ乎^{なり}。不^な曾^{さへ}識^し其^を何^{なん}處^{ところ}也^{なり}。少^{せう}焉^{なり}夢^む覺^{かく}待^{たい}且^{かつ}衣^い冠^{くわん}入^い拜^{はい}尊^{そん}像^{ざう}。熟^{じやく}憶^い夢^む中^{ちゆう}事^{こと}。信^{しん}疑^ぎ相^{さう}半^{はん}無^な敢^あ自^{より}決^{けつ}猶^{なほ}豫^よ終^{しゆう}一^{いつ}終^{しゆう}朝^{ちやう}際^{さい}。越^え前^{ぜん}所^{ところ}司^し之^を使^し方^{はう}屆^き。獄^{ごく}以^{もつ}和^わ田^{でん}郷^{きやう}。神^{しん}木^{もく}之^を事^{こと}與^よ嚙^{しか}昔^{しやく}所^{ところ}一^{いつ}夢^む宛^{えん}若^{かく}合^が符^ふ節^{せつ}偶^ぐ屬^{じやく}慧^え心^{しん}院^{いん}。源^{げん}信^{しん}僧^{そう}都^と。自^{より}京^{きやう}師^し來^{きた}上^{じやう}滿^{まん}仲^{ちゆう}語^ご以^{もつ}夢^む之^を異^い。及^{かつ}越^え前^{ぜん}訴^そ訟^{そう}之^を事^{こと}信^{しん}喟^き然^{ぜん}三^{さん}歎^{たん}曰^い。此^こ靈^{りやう}夢^む也^{なり}。所^{ところ}謂^い正^{ただ}夢^む也^{なり}。非^ひ是^{これ}靈^{りやう}思^し喜^き懼^く之^を比^ひ所^{ところ}能^よ髮^{はつ}髻^{けい}也^{なり}。實^{じつ}神^{しん}託^{たく}不^な虛^こ。昔^{しやく}者^{もの}行^{ぎやう}教^{きやう}武^ぶ內^{ない}宿^{しゆく}彌^み之^を後^ご也^{なり}。居^ゐ和^わ州^{しゆう}大^{だい}安^{あん}寺^し。貞^{てい}觀^{くわん}元^{げん}年^{ねん}。詣^よ豐^{ほう}之^を宇^う佐^さ八^{はち}幡^{はん}神^{しん}祠^し。一^{いつ}夏^げ九^く旬^{しゆん}。晝^{しゆく}讀^{よみ}諸^{しよ}大^{だい}乘^{じやう}經^{きやう}。夜^や誦^{じゆ}密^{みつ}咒^{じゆ}。法^{ほふ}已^や滿^{まん}。夢^む大^{だい}神^{しん}曰^い。久^{きう}受^{じゆ}法^{ほふ}施^し。不^な欲^{ほつ}離^り師^し師^し迴^{くわい}王^{わう}城^{じやう}我^{われ}又^{また}隨^{したが}行^{ぎやう}居^ゐ王^{わう}城^{じやう}側^{わき}當^{たう}護^ご皇^{かう}祚^そ耳^{みみ}。教^{きやう}漸^{ぜん}著^{しやく}山^{さん}崎^き其^を夜^や又^{また}夢^む大^{だい}神^{しん}曰^い。師^し見^み我^{われ}所^{ところ}居^ゐ俄^が覺^{かく}便^{べん}起^き見^み東^{とう}南^{なん}。男^{なん}山^{さん}城^{じやう}國^{こく}男^{なん}山^{さん}下^か。山^{さん}下^か有^あ流^{りゅう}。名^な石^{いし}清^{せい}水^{すい}。鵠^{こく}蜂^{ほう}上^{じやう}現^{げん}大^{だい}光^{くわう}。凌^{りやう}晨^{しん}至^し光^{くわう}處^{ところ}真^{しん}靈^{りやう}區^く也^{なり}。教^{きやう}便^{べん}錄^{りく}二^に事^じ表^{へう}奏^{そう}。帝^{てい}詔^{しよく}橋^{きやう}工^{こう}部^ぶ一^{いつ}準^{じゆん}宇^う佐^さ祠^し規^き建^{けん}新^{しん}宮^{きやう}世^{せい}言^{げん}教^{きやう}所^{ところ}見^み大^{だい}神^{しん}。本^{ほん}身^{しん}是^{これ}彌^み陀^た觀^{くわん}音^{いん}勢^{せい}至^し三^{さん}像^{ざう}。現^{げん}袈^か裟^さ上^{じやう}。因^よ是^{これ}殿^{てん}內^{ない}安^{あん}三^{さん}像^{ざう}。由^{よし}是^{これ}觀^{くわん}之^を。宇^う佐^さ之^を神^{しん}移^い石^{いし}清^{せい}水^{すい}也^{なり}。專^{せん}為^な護^ご帝^{てい}都^と今^{いま}之^を神^{しん}。欲^{ほつ}赴^{しゆ}縁^{えん}于^お北^{きた}陸^{りく}亦^{また}尚^{なほ}急^{きふ}利^り也^{なり}。彼^か土^ど之^を生^{せい}況^{きやう}鎮^{ちん}北^{きた}道^{だう}一^{いつ}番^{ばん}寔^{じつ}不^な異^い皇^{かう}城^{じやう}擁^{よう}護^ご者^{もの}乎^{なり}。倘^{たう}依^い顯^{けん}蜜^{みつ}法^{ほふ}門^{もん}。一^{いつ}念^{ねん}三^{さん}千^{せん}。具^ぐ妙^{めう}法^{ほふ}。彌^み陀^た即^{すなは}唯^{ただ}心^{しん}彌^み陀^た。淨^{じやう}土^ど即^{すなは}己^こ身^{しん}淨^{じやう}土^ど。三^{さん}諦^{てい}一^{いつ}心^{しん}則^{すなは}彌^み陀^た不^な在^に遠^{とほ}。一^{いつ}心^{しん}三^{さん}諦^{てい}則^{すなは}利^り海^{かい}奚^き所^{ところ}妨^{さう}。○(ル)(ヌ)阿^あ字^じ內^{ない}證^{てい}是^{これ}其^を本^{ほん}。四^し種^{しゆう}曼^{まん}荼^た羅^ら是^{これ}其^を迹^{せき}。本^{ほん}迹^{せき}雖^{なほ}殊^{しゆ}

。不思議ハ一ナリ也。隨緣赴感靡不周。豈此之謂乎向。道越前和田ノ郷ノ神材○此神力ノ所致。而國家將興。必有如斯ノ禎祥。源家ノ幸孰大焉。信諄諄苦諭。滿仲聽說怡悅。不任甚。因選差渡部綱。使下向越前國。奉旨就和田郷。鄉除宮地。且掌宮祠經營之。官規一準。石清水宮實天德三年四月十五日也。今年五月十三日。創興土木。百工共手相濟。悅焉不怠。勞筋苦骨。夜以繼晷。越明年八月十三日。方鳩僦功。本社。拜殿。樓門。廻廊。神樂堂。護摩堂。齋堂。鐘樓。其餘房舍。所宜有殿廡。後厦庫藏。法物器具。無不悉備也。輪奐宏麗。輝玉成。茲戴二月。預俾慧心僧都徒。順晶坊持本尊來。安座假宮。乃擇日。以同八月十五日。恭奉遷新宮。滿仲又以藤原仲光為奉幣使。詣新社。獻神馬一匹。及金裝。橫刀。靶。自筆法華經一部。亦大賜。神馬一匹。及金裝。橫刀。靶。自筆法華經一部。亦大賜。鄉民此曰清水涌於社前。白羽。嚆矢。樹殿上。鯉魚木見者咸驚歎焉。又託宣。宮地神竹生茂。當知是源氏之繁盛也。生而還枯。物之常也。數百年後。竹或枯。勿復恐惶。今日。官竹大枯。神。其夜宮異。一方生竹數千竿。猗猗成叢。果如神託。清水出焉。故本房名養泉寺。神竹生焉。故號竹林山。此時計社地。東西五六町。方六尺五寸。為一步。三十步為一畝。南北可一十三町。其中區畫。而置二院房者。凡慮十有六所。曰圓持院。本房養泉寺。曰松林院。曰杉本坊。曰多門坊。曰三明坊。曰嘉例寺。今為曰東靈寺。四院。依然存。故境。曰安住院。曰光明院。曰圓融院。曰本光院。曰長久院。曰己心院。曰來迎院。曰慧照院。別置淨德寺。無常院。惟舉二圓持院。充當社。別當職。此外分宮司。欄宜。巫覡戶。祝局。各隨宜。頒賜給地。是故一疆之內。而有宮司。町祝。町。年中諸房。油蓋。曾歷其用者。集撤諸一所。積如山。故有土器山。其所。土器。執事。

行事相集等。計歲分。故有等殿。其榮盛可思。而識之。除社內社家。暨一十六所。房地。殊割和田。庄二百餘町。膏腴地。為御供料。兼資本房香華。用更官命。發領內近邑。步役。多般。松。杉。檜。楸等。佳木。令樹栽。境上。此乃似。欲觀其鬱密。大。美。陰。於瑞籬也。爾來。杓。不絕。裡。無有。血食。之奉。而。祇懷。蘋蘩。之誠。每歲正月七日。至同十一日。曰。修護摩供。專祈。請。寶祚。長久。武運。亨通。十二日。轉讀。大般若。六百軸。孔明王經。最勝王經等。諸大乘經。更。憫。天下。泰平。國家。安全。二月十一日。有神輿。幸。御旅所。御旅所。今之宮地。十町。儀式。放生。會。同十二日。行。競馬。流。同十三日。神輿。還。御本社。於。拜殿。設。法華八講。會。同十四日。復。修。護摩。供。同十五日。至十六日。俾。諸。伶人。代。奏。法樂。擊。節。蹈。舞。大。唱。萬。歲。天。雨。則。延。三五。目。必。期。晴。而。後。將。之。至。八月。祭。禮。也。則。大。栗。同。正。二。月。儀。但。闔。國。輻。湊。力。者。關。角。獻。童。男。女。且。謠。且。躍。世。世。禰。和。田。大。寄。以為。奉。神。慮。已。歷。四。百。九。十。餘。年。至。後。花。園。院。亨。德。中。於。乎。國。步。斯。頻。越。前。國。主。斯。波。武。衛。治。部。大。輔。義。健。一。字。千。代。德。麻。呂。蚤。世。垂。武。衛。家。坐。絕。其。統。竟。養。大。野。修。理。大。夫。持。種。次。男。左。兵。衛。督。義。敏。為。子。家。臣。織。田。彈。正。忠。興。信。千。福。中。務。少。輔。久。國。增。澤。甲。斐。守。祐。德。二。宮。左。近。將。監。冬。澄。弟。駿。河。守。重。衡。等。與。義。敏。有。隙。是。亦。不。屑。敢。就。已。助。相。謀。義。敏。於。將。軍。義。政。公。遂。輒。追。義。敏。逮。義。健。卒。織。田。千。福。等。復。請。滋。川。左。兵。衛。尉。義。紀。子。義。廉。嗣。斯。波。家。曰。斯。波。治。部。大。輔。義。敏。育。在。幽。仄。以。候。時。曰。籍。乎。伊。勢。伊。勢。守。貞。親。訴。室。町。殿。下。乞。赦。歸。參。殿。下。命。宥。恕。焉。義。敏。以。長。祿。元。年。四。月。入。洛。詣。殿。謝。恩。織。田。千。福。增。澤。等。脆。然。不。悅。乃。興。兵。要。途。弑。義。敏。義。政。大。怒。致。簡。書。於。黑。丸。城。主。朝。倉。彈。正。左。衛。門。敏。景。七。代。盡。討。代。織。田。千。福。增。澤。二。宮。等。

逆徒。敏景國士。胸中森森。武庫。初承命。凶門。目。光。廟。略。於和。田。神。前。而。最。深。祈。勝。策。伏。一。心。冀。哀。祐。敏。景。率。兵。九。千。餘。騎。發。向。敦。賀。郡。與。敵。對。壘。相。攻。從。長。祿。二。年。春。至。翌。年。五。月。十。三。日。大。一。戰。尋。寬。正。元。年。二。月。二。十。一。日。率。兵。八。千。五。百。於。阿。波。賀。城。戶。口。力。戰。大。破。同。三。年。八。月。二。十。四。日。戰。于。靖。江。新。庄。同。五。年。八。月。八。日。又。率。兵。七。千。五。百。戰。于。檜。山。蓮。浦。同。六。年。七。月。十。七。日。率。兵。六。千。戰。于。清。水。山。同。八。月。二。十。八。日。率。兵。二。千。七。百。戰。于。芝。原。至。此。七。年。其。樹。戰。功。凡。二。十。六。度。屠。首。三。千。餘。級。拔。柵。陷。城。不。可。校。計。也。追。亡。遂。北。屢。戰。屢。勝。和。田。八。幡。示。現。敏。景。之。軍。中。面。蒙。神。加。數。矣。敏。景。時。獻。捷。書。於。義。政。大。悅。累。賜。感。狀。此。時。織。田。族。稍。雖。滅。而。千。福。增。澤。等。敗。逃。尚。樞。籠。干。山。城。蓋。干。山。為。二。要。衝。固。百。關。其。不。可。攻。也。恰。若。金。城。湯。池。敏。景。遣。堀。江。景。用。參。籠。和。田。八。幡。宮。一。七。日。夜。丹。誠。祈。請。冥。助。親。爲。羽。檄。召。兵。於。四。方。合。諸。國。援。兵。所。帥。兵。總。一。萬。五。千。五。百。人。大。齋。軍。實。寬。正。六。年。乙。酉。正。月。中。旬。發。黑。丸。城。向。干。山。城。敏。景。素。英。將。先。僭。間。牒。伺。敵。之。用。心。而。後。以。堀。江。五。郎。三。郎。孝。晴。爲。大。手。大。將。以。二。蜂。須。賀。勘。解。由。左。衛。門。氏。貞。爲。二。搦。手。大。將。迄。其。餘。突。將。屯。將。散。騎。武。騎。部。伍。隊。旌。旗。鐘。鼓。鳥。銃。火。矢。竹。束。鹿。砦。備。一。麾。事。已。定。矣。既。而。到。同。五。月。十。六。日。隨。關。聲。士。卒。鼓。而。進。之。當。城。有。一。大。河。雨。水。暴。漲。兩。岸。或。出。沒。洪。波。滔。天。奔。流。碎。巖。一。軍。有。難。色。而。未。定。先。登。敏。景。尚。心。念。和。田。八。幡。敏。景。所。乘。馬。名。雲。龍。足。其。每。出。師。必。乘。之。氣。色。固。異。他。大。嘶。不。已。勢。若。將。飛。騰。入。水。敏。景。不。能。得。而。制。信。馬。入。河。中。馬。一。足。之。不。蹶。渡。大。河。如。蹈。平。地。猶。障。泥。不。濕。徑。著。南。岸。復。躍。而。在。於。上。士。卒。相。從。涉。者。皆。以。馬。處。爲。渡。齋。晉。仲。用。竜。馬。之。智。取。途。

晉仲猶然。況如今神明所如者乎。城兵亦天下之精英。不可容易。擊而破之。合戰數月未決。必贏輸。忽空中有白鶴。自東來。翔翔平兩陣間。相望將謂是八幡使者得之者。聞可勝矣。人人祝其入陣中。須臾。鶴入千福久國軍中。城兵愕見。鶴便化。成一片短冊。久國接而見之。歌曰。龜彌烏優。抽蟲休悲。拏伽識。拏波極資。休德。悲姿資。幾休尼拏。波那和知。離離久國見歌。已曰。吾其亡。爰無日。是天之罰。不可追也。城兵僉吞聲。敏景乘隙。攻擊。勢如破竹。又似常山之蛇。首尾相應。久國軍大潰。士卒倒戈逆刺。流血漂盾。敏景益進。急擊。斬賊魁千福久國。士卒恐。降之不。及。殲誓首面縛。爭歸降者。若懼然。崩厥角。干山城一戰。便拔。追擊。增澤甲斐。守同其殘兵。於殿下桶田岡保處。襲伐。二宮左近兄弟。於波著館。獲首八百餘級。俘獲五十八人。遣天野兵庫頭。判彦五郎。獻久國以下。數人。首於義政。其餘盡梟諸轅門前。所謂兵忿者。敗。兵驕者。滅。其如久國者。儔。敏景初入。營。來。無。曾。有。亡。矢。遺。鏃。之。費。亦復不。軍。暴。軍。罷。糧。之。患。同。年。六。月。十。八。日。大。軍。凱。旋。干。黑。丸。城。載。戰。二。千。戈。載。囊。弓。矢。同。二。千。一。日。齋。戒。參。拜。和。田。神。廟。厚。修。奉。幣。之。禮。獻。納。神。馬。太。刀。鎧。弓。矢。教。三。神。樂。歌。賊。滅。兮。國。土。寧。山。礪。河。帶。吾。皇。維。保。丁。後。土。御。門。帝。文。明。三。年。辛。卯。五。月。二。十。一。日。義。政。公。以。越。前。國。賜。敏。景。用。賞。莫。大。之。戰。勲。敏。景。不。啻。檀。功。名。於。蓋。代。爲。越。前。牧。中。興。本。系。徒。居。一。乘。谷。城。戶。內。以。如。敏。景。者。可。謂。王。之。爪。牙。國。家。柱。石。之。臣。也。苟。自。匪。無。二。信。心。歸。投。神。明。勃。陀。而。誠。能。被。二。感。應。者。安。得。如。此。其。光。大。哉。欲。唯。報。神。德。顯。靈。驗。是。故。轉。仍。源。氏。之。舊。貫。修。中。復。和。田。神。祠。綉。薨。珠。砌。增。將。既。之。華。麗。放生。八。講。繼。已。絕。之。祭。禮。加。旃。捨。和。田。邑。待。千。貫。文。地。爲。

有永ノ御供資ト。晨敬夕拜。莫ト曰。唐焉。此所以敏景武功如願ノ榮耀在レ躬也。後一百二年至正親町帝天正中ニ。左衛門督義景朝倉第與織田信長。數ハ相挑戰而無利。敗北奔如ユク大野ニ。其臣朝倉式部大輔景鏡詒之卒。圖弑干曹源寺ニ。朝倉氏於是乎泯然殆斷緒矣。屬者本願寺ノ徒。和田ノ本覺寺。藤嶋中ノ郷ノ超勝寺。荒河ノ興行寺。宇坂本向寺久米ノ莊嚴寺等。首倡越・加・能三州一宗衆徒ヲ與高田宗ノ徒。諍ニ宗旨勝劣ニ。二宗ノ徒蜂起。相伐不レ已其初本願寺ノ徒。有相街。攻メ加州石川郡。殺富樫介政親。拔ク高尾ノ城。北陸爲メ之カ騷動シ。以ニ信長ノ故。神社・佛閣。在其ノ間者。往往罹兵火ノ所。燔。東郷村西山。有天台律院。曰興祥寺。住持某阿闍梨者。夢ニ有異人一來。謂曰。我是和田ノ神。暫假汝房以辟兵火。兵火者時也不可。不レ以避之。汝出看。我立處。俄覺遽開戸。瞻ルニ之。石上若レ有物。而。光明赫奕。乃就是之。無量壽佛。長可二三尺。面西立。阿闍梨。感涙懽喜。以袈裟裹持。歸院。頂禮恭敬。實功。曇華之想。黎明一揆之徒。放火ヲ和。田ノ神宮。並房舍林木。數百餘霜ノ壯觀。一朝化烏有。矣。夫百社僧社人。或焚焉。或鑿焉。惟三明坊。脫而還藏。經二十年。待亂撥運革。還來舊所。擺遺燼。締叢柯。傍擗。茆廬自居之。或時西山ノ彌陀。夢見三三。曰。我今欲證。汝等信心。是故往彼來此。應知信心如水。神佛如月。水清則於焉月現。無心於現。而能現。只水所取焉。聖應無不徧。而全因感之不同。也。汝等其勉。旃勿懈。明速張燈燭。照瞻房內。尊容儼然。異香四熏。早晨與祥ノ阿闍梨亦以夢來告。一如三三之所。夢。後陽成院。慶長六年春。東照君。以越前國賜結城黃門秀康郷。茲載二月。閣老伊豆守。本多富正。先來國預巡檢封内。記所。有名山・巨瀆。古蹟・舊址。同年五月。秀康郷自結城入部。居二。

三月肇蒐干東郊。造和田ノ叢祠前。下馬。乃問從者。叢祠底ノ神此處又名甚。從者對曰。地名和田。傳此昔在多田ノ滿仲所草創。八幡大社。近。歷天正ノ之兵火。子立極。至干茲。事委曲。之伊豆守記錄。公歸以是問。伊豆守果如從者言。公感神德。昭昭。於澆季。遂命有司。重興。廟社。干時方築城。北之庄。故本社纔落。未遑。作殿廡。至參河守參議忠直公。繩武當國。仁政曰布。亦母浸漁。百姓克崇。信神祇。而不敢猜。以和田ノ廟。門樓不。完備。有。不。嫌。於其心。再增宮制。造。拜殿以下。山。節。藻。稅。視之。天正之舊觀。千百猶一。二。三。明坊。司。當社。別當職。爾。後。三。明。每歲。升。府君。殿上。掛。武田。信玄。所。寄。大聖靈驗。不動明王。像。一。此。掌。三。明。坊。所。持。也。爲本尊。振。瀨。金。鈴。一。修。護。摩。供。轉。大。般若。一。加。持。國。運。長。久。一。元。和。九。年。癸。亥。正。月。十。五。日。賜。社。領。壹。百。石。一。即。以。二。東。村。爲。采。地。一。次。伊。豫。守。參。議。忠。昌。公。立。上。使。阿。部。四。郎。五。郎。以。上。意。來。宣。下。被。領。充。本。府。五。十。萬。石。干。忠。昌。公。大。野。三。萬。石。干。出。羽。守。直。政。公。勝。山。二。萬。石。干。大。和。守。直。晴。公。之。肯。大。祿。雖。瓜。判。派。分。而。此。社。領。竟。無。以。侵。削。一。以。至。經。光。通。公。昌。親。公。綱。昌。公。昌。明。公。有。故。昌。親。公。再。治。賜。新。地。吉。邦。公。宗。昌。公。初。五。萬。石。在。松。岡。當。相。繼。本。家。宗。矩。公。數。居。沿。革。亦。吾。社。領。如。故。却。後。幾。十。世。共。國。其。母。一。湮。蔑。一。必。矣。當。院。以。三。明。坊。尊。久。一。爲。中。興。開。基。第。一。世。稱。三。部。法。大。阿。闍。梨。法。印。大。僧。都。尊。久。大。和。尚。位。一。第。二。世。大。阿。闍。梨。法。印。大。僧。都。尊。英。大。和。尚。位。於。此。時。一。汲。三。明。坊。一。爲。三。明。院。一。第。三。世。傳。燈。大。阿。闍。梨。法。印。大。僧。都。實。純。大。和。尚。位。第。四。世。大。阿。闍。梨。法。印。權。大。僧。都。賢。純。大。和。尚。位。燈。燈。續。燭。綿。綿。密。密。一。

旨

享保十五龍次。庚戌。季春。下浣。日。

龍阜沙門傳東漸謹^テ依^{ニテ}古記^ニ筆削^ス

和田八幡宮と『和田八幡宮縁起書』について（角鹿）